



新日本設計（株）
岩井克之

－ 東日本大震災業務の記憶 －

1. はじめに

新日本設計株式会社仙台事務所営業の岩井克之と申します。よろしくお願ひいたします。今回、「みちのく Web 版」へ、「震災に関する上下水道支援活動の紹介や、そこで得たことの紹介」のテーマということで、震災直後より現地で経験した事柄について紹介したいと思います。

2. 震災直後

震災発生 of 3月11日午後、私は営業活動のために石巻市内におりました、前日に気仙沼市水道部より業務のために借用した水道事業認可書を返却する予定で気仙沼市に向かおうとした時地震が起きました。緊急地震速報が鳴り、車を路肩に寄せて停車した途端、ものすごい揺れに襲われかなり長い時間揺れていました。ただ事では無いと感じ、取りあえず会社に安否確認のメールを送り、一緒にいた同僚と自宅に向いました。途中、矢本で同僚を下し、自宅の野蒜に向い、途中、吉田川を津波が遡上しているのが見えて不安を抱きながら車を走らせました。案の定、車では進めなくなり走って家に向いました。野蒜小学校に到着した時には津波が完全に入

った段階で、会社に「津波に家がのまれました」とメールを送ったのを最後に連絡を取れなくなりました。現地にいる人たちで助け合い、体育館にいる人たちを救助し小学校の校舎に移して、現地にいる人たちで助けが来るまで対応して何とか助かりました。震災から3日目に仙台事務所の山田所長が避難所に私を探しに来て頂き、5日目には会社に準備して頂いた仙台市内の現自宅に居を構える事が出来ました。生活の基盤はとりあえず出来たので安心して仕事に取り組むことが出来ました。



3. 女川町などの支援

事務所自治体から支援の要請が来ましたので、最初の仕事は支援に行くためのガソリンの入手と高速道路利用のための緊急車両登録でした。仙台事務所で対応できない時点では盛岡の東北支社に応援して頂きました。仙台事務所には本社等から支援の物資が来ていましたので、レトルトご飯をレンジで温め、缶詰を持って出掛けました。一番おぼえているのは、がれきを寄せてやっと通れる道を通って女川町に入って女川浄水場にたどり着き、役所担当者と会った時「何か必要な物はありませんか？」と聞いたら「書くものが欲しい」と言われ持っていたボールペンを渡した事です。本当に何も無かったので、災害査定の実験があったので、被害状況を記録に残す必要がある事を説明し、カメラを3台置いて来ました、記録を残したそのおかげで災害査定が順調に進みました。気仙沼市では、水道部は焼失して何もかも無くなっておりまして。たまたま水道事業認可書が私の車のトランク中に助かっておりましてので、早速、新月浄水場に仮設された水道事業所に届けました。夜勤あけの職員が事務所の隅で寝袋や毛布に包まって寝ている混乱する事務所で課長補佐を見付け出し、直接渡した時、とても喜んで頂いたのを鮮明に覚えています。石巻広域水道企業団の災害査定では、早急に対応しなければならない業務量が膨大で仙台事務所では対応しきれない状況となり、弊社の名古屋事務所より応援を頂き何とか対応出来ました。大崎市、栗原市、仙台市などからも支援要請があり、困窮している状況を「何とか助けなければならない」という気持ちで、仙台事務所一丸となって契約手続き前でも次々と仕事をこなして行きました、結果として、平成23年度の受注は前年度の2倍に達していました。災害の混乱の中、それぞれ個人的には大変な思いをしながら少しでも世の中の役に立つべく頑張っていました。



気仙沼市では、水道部は焼失して何もかも無くなっておりまして。たまたま水道事業認可書が私の車のトランク中に助かっておりましてので、早速、新月浄水場に仮設された水道事業所に届けました。夜勤あけの職員が事務所の隅で寝袋や毛布に包まって寝ている混乱する事務所で課長補佐を見付け出し、直接渡した時、とても喜んで頂いたのを鮮明に覚えています。石巻広域水道企業団の災害査定では、早急に対応しなければならない業務量が膨大で仙台事務所では対応しきれない状況となり、弊社の名古屋事務所より応援を頂き何とか対応出来ました。大崎市、栗原市、仙台市などからも支援要請があり、困窮している状況を「何とか助けなければならない」という気持ちで、仙台事務所一丸となって契約手続き前でも次々と仕事をこなして行きました、結果として、平成23年度の受注は前年度の2倍に達していました。災害の混乱の中、それぞれ個人的には大変な思いをしながら少しでも世の中の役に立つべく頑張っていました。



4. 教訓として

震災から7年9か月が経ちました。震災時保育園年中組だった我が家の娘ももうすぐ小学校を卒業します。復興もかなり進んでいてインフラの整備については終わ

りが見えて来たと感じます。しかし、人々の生活は元には戻りません。無くなった物は取り戻せないのが現実です。少しでも元の生活に近づけ、それ以上の幸せを得る事が出来るように、生活に直結する上下水道を担当している私たちに何が出来るか考え、社会に貢献できる我々の仕事に誇りをもって、日々の業務に当たりたいと思います。

今後ともよろしく願いいたします。

